

福井支部ニュース

2022年度 第11号

日本科学者会議福井支部

連絡先: 山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆2022年度 JSA 福井支部 第6回幹事会の概要報告 (山根 清志)
- ◆24 総学 A1 分科会報告 (概要) ロシアの原発軍事テロ (山本 富士夫)
- ◆時評紀行 風力発電・放射性廃棄物紀行 (4) サロベツ原野 (小野 一)
- ◆書評 「終止符のない人生」 反田恭平 (森 透)

[2022年度 JSA 福井支部 第6回幹事会の概要報告]

2023年2月6日(月)午後6時から第6回幹事会がオンライン方式で開催された。

今回の最重要議題たる①JSA 北陸シンポについて、から議事に入った。はじめに、1月27日開催の第2回北陸地区会議での、当該案件に係る幹事支部からの進捗状況説明につき、山本代表幹事より報告がなされた。それによれば、石川支部(幹事支部)が基調講演を打診していた駒込武さん(京都大学大学院)が、4月は多忙でムリだということになった。従って現在(2月6日)、4月開催予定のJSA 北陸シンポに基調講演の担当が未定のままである。その上、「選択と集中を基本方針とする政府方針は、大学の改善に資するものになっているか」(仮題)との石川支部の提案のままを統一テーマとして、各支部からの報告が用意できるのか懸念があっていささか不透明、という事情等も手伝って、今年のJSA 北陸シンポは

中止にするのがスジではないかとの意見が出され、反対意見はなく、これを以て福井支部としての意見とすることとなった。

② 支部例会について審議した。

◎科学者の権利問題 1月23日(月)午後6時からオンラインで開催された。高木秀男幹事による報告「科学者の権利問題」は、支部から10名、支部外から3名、計13名が参加した。高木報告に関連して、2月中でなくてもよいから、参加された埼玉支部の丹生淳郷氏に何か文章を書いてもらうよう頼んでみたらどうか、ということになった。

◎原発問題 岸田政権の「原発回帰」暴走政策を阻止する市民公開講座として開催する。

- ・山本富士夫代表幹事、笠原一浩弁護士から各20分報告してもらい、その後、参加者と討論する双方向方式で開催する。(参加費無料)
- ・日時は2月25日(月)午後2時～。場所は福井市フェニックスプラザ4階会議室。Zoomでの参加もできるようにすることを確認した。

◎「大学の自治と学問の自由」と学術会議問題 2つの問題を合わせて例会を具体化する。

- ・北海道支部の光本先生に、主に岸田政権の暴走政治について、「学問の自由」と科学技術イノベーション批判について話してもらうことで快諾を得た旨、報告あり。また、土・日にこだわらず、光本氏の4月の日程にあわせて例会日を設定する必要があるとの指摘も出された。なお、中嶋哲彦氏には依頼交渉中とのこと。

◎核共有・アメリカ合衆国と約束している問題について → 継続審議

③ 支部結成50周年記念事業の第1回実行委員会についてである。

「福井の科学者50周年記念号」発行の事業を、高木秀男幹事を座長に、幹事会内に実行委員会を作ってすすめていくことになったが、どの様にするか。高木座長からは10周年の時に30号記念特大号を作った経験を例にとり、最初に決める大枠のイメージこそが決定的に重要だとのこと。とりあえず、次の幹事会までに各幹事がそれぞれ案を考えて持ち寄ろうということになった。

④『福井の科学者』と支部HPについて

139号の2022年12月発行予定が1ヶ月遅れたため、2023年1月

号として発行されたこと。そして、HPに掲載作業中であることを確認。
また、次号は本年の6月には発行せず、発行できるとすれば12月にまとめた形でのものになるだろうとのこと。

⑤支部ニュースについて

第10号まですでに発行済みで、11号が2月中に発行される予定であるとのこと。このところ、記事を書く人が固定化する傾向がみられ、次回幹事会では、広く会員から記事を出してもらうにはどうすればよいかそのための工夫について議論したいとの小倉幹事からの呼びかけがあった。

⑥支部財政と会員拡大について

伊藤幹事から、会員による会費納入状況ならびに支部財政の有り様等についてと、会員数の増減と現員数についての報告があった。

⑦JSA 全国より 役員選考のための事務局員、代表幹事候補者推薦について この議題は、時間がなくて議論できなかった。

⑧その他

- ・「建国記念の日」反対！ 民主主義と憲法を守ろう 2.11 福井県集会
 - ・「第12回 3.11 さよなら原発福井県集会 in ふくい」
- それぞれの集会についてのアナウンスがあった。

他には特になく、次回幹事会を2023年3月6日（月）と決めて、午後8時10分すぎに幹事会を終了した。出席幹事は9名であった。

（山根 清志）

【第24回総合学術研究集会】A1分科会での報告（概要） ロシアによる原発軍事テロを考察する

1. はじめに一 背景と目的

1945年8月に原子爆弾が広島市と長崎市に投下され、放射線・熱線・爆風による生命と環境破壊が起き、大惨事となった。人類は、放射能環境破壊の凄まじさを知った。

ロシアは2022年2月24日にウクライナ侵略を開始し、直ちにウクライナにある原発2カ所（チェルノブイリ、ザボロージャ）を占拠した。現

在のところ、両原発において核爆発は起きていないようであるが、核兵器と原発は、表裏一体関係にあることが広く認識されるようになった。

私は、第31回全国原子力発電問題「新潟シンポ2009」で、原発災害を引き起こす「4大トリガー」として、(1)自然災害（地震、津波、火山噴火、豪雨、竜巻など）、(2)人為ミス（設計、工事、運転、保守管理など）、(3)軍事テロ、(4)サイバーテロを提示した。

F1（福島第一）原発事故は上記の(1)と(2)が原因となった。TMI（スリーマイル島）とチェルノブイリ原発事故の原因は(2)である。今回のロシアによる原発占拠は(3)である。(4)については24総学B3分科会で衛星による情報通信テロによる原発攻撃の現実を報告した。ここで、工学者の視座から軍事テロを阻止したいと訴える。

2. 工学と工学者の役割

原発システムにおける工学者の役割が大きいことを述べておきたい。工学とは、機械を含む産業システムの設計・製造・機能などの技術を扱う学問であり、工学の基本要素は、材料・エネルギー・制御・情報である。工学は理学の応用という定義は、容認されない。工学では、常に技術に関わって理論と実践のバランスを扱うのであり、原発では理学に偏れば重大な支障をきたす恐れがある。工学者は、素養として技術者倫理を含む総合学術性を備えていなければならない。

3. 軍事テロを起こさせないために

ロシアのプーチン大統領ら独裁政治権力者たちは、国連憲章や核不拡散条約などを遵守しようとしない。まるで無法者である。彼らは、核エネルギーを自分の管理下に置き、政治的優位性を保持したがる。歴史が教えるように、権力者たちが最も恐れるのは、国民・市民の大多数から支持を失うことである。彼らの恐れは、彼らの弱みでもある。彼らは、自己保身術に長け、嘘・隠蔽・捏造を繰り返し、科学的議論を避け、神話的感情的議論によって国民・市民の支持を得ようとする習性がある。

私たちは、科学的世論を醸成し、全世界の市民と連帯して権力者批判を行い、非核・脱原発の民主主義社会を目指すべきである。

4. おわりに

ロシアによるウクライナの原発軍事テロは、原発と核兵器が表裏一体で

あることを示した。軍事テロによる原発災害を起こさせないためには、世界市民の連帯による非核・脱原発運動が必須であることを主張したい。

(山本 富士夫)

[書評]「終止符のない人生」 反田恭平, 幻冬舎 2022年7月

本書は2021年10月のショパン国際ピアノコンクールで、2位に輝いた著者の随筆である。筆者は特にピアノに深い関心があるわけではないが、ショパンコンクールというと、あのブーニンが世界的に有名であり、最近もBSでブーニンの9年ぶりの復帰コンサートを特集しているのである程度関心を持っている。妻もブーニンのファンであり、この反田氏のファンでもあるといえる。2位という世界は普通では考えられない世界であるが、そのピアニストがどのような本を書かれるのか、関心を持って購入した。

第一印象は、なかなかすごい本である。自分が2位となったショパンコンクールのことが一番のアピールかと思ったが、内容はむしろ一緒にコンクールを闘った幼馴染の小林愛実への尊敬と配慮、そして若くして会社を立ちあげて社長となり、若手の育成を日本で行いたいという夢が書かれている。単なるピアニストではない。芸術家だけではなく、起業家でもあり、戦略家でもある著者の多様性を感じられる本である。

まずは、ショパン国際ピアノコンクールの3週間の闘いの内容だ。DVD予選、予備予選を勝ち抜き、86人の中で1次予選を突破し、2次予選、3次予選と進み、最後は12人のファイナルにも残った。そのプロセスがたんたんと書かれているが、それぞれの選曲のデザインが素晴らしい。ショパンの数多くの曲から、自分の主張・考え・思想から選曲して全体のデザインを考える力量は、やはりすごいものがある。3次予選で駄目だと諦めた人生がファイナルの12人目に名前を呼ばれた瞬間の感動、なんともすごい人生である。最後のファイナルについては次のように書かれている。(120頁)

一音目が鳴り出す瞬間、これまでの予選とは違って、このコンクールで最もありのままの自分でいられた。そして演奏中は、僕の一番好きなコ

ンチェルトをショパンコンクールファイナルという場所で純粋に楽しむことができた。オーケストラと聴衆が共鳴し、ショパンと融け合う夢のような40分間を過ごし、僕のショパンコンクールは幕を閉じた。

ファイナルを楽しむという「余裕」があったのかと感じられる。著者はもともとサッカー選手になりたかったと回想しているが、ピアノは趣味の世界とも言っている。しかし、今は生活を支えるプロとしてのピアニストである。筆者が著者の夢に注目するのは、日本の保守的なクラシック業界への批判であり、自分なりに音楽の世界の新たなデザインと未来の音楽家の養成を目指している点だ。日本人だけではなく世界の若者に来てほしいという音楽の専門学校を日本、それも奈良県につくりたいという夢だ。起業家として、社長として、自分なりの夢を目指し続ける貪欲さは素晴らしい。「夢」について、「おわりに」に次のように書かれている。(211頁)

今、僕は子どものころに抱いた夢を叶え、また新たな挑戦へと足を進めています。確かに、夢をもつということは大事ですが、夢をもっていない人にそれを強制しても、すごくプレッシャーでしょう。だから僕は、皆が夢を必ずもてとは思いません。でも、今自分の目の前にあることを突き詰めてやり抜くことは誰にでもできるはずです。

1994年9月1日生まれの彼は、現在28歳である。筆者とははるかな年齢の開きがあるが、この著作から学ぶものは多かった。力をもらえた、生きるエネルギーを与えられたという感慨がある。年齢を超える心地よさがあった。著者はかつてブーニンからも教えを受けたことがあり、9年ぶりの復帰のNHKでの特集番組では激励のコメントを述べていた。ピアノの世界や音楽芸術の世界は筆者には理解できないが、人生哲学を学ぶことができたことに感謝したい。

(森 透)

2023年前期の会費納入をお願いします

新しい年が始まりました。今年前期の会費をお願いします。また、過去の未納会費のある方は、分納でも結構ですので、至急納入をお願いします。

〔時評紀行〕風力発電・放射性廃棄物紀行(4) サロベツ原野

「次の停車駅は豊富。ホームが短いので、最後尾にご乗車の方は前の車両よりお降り下さい」。かつて、夜行急行「利尻」が札幌と稚内を結んでいた。学生時代に貧乏旅行をしていた時のこと。夜の明けきらぬ原野を走る列車の車内放送で起こされた。こんなところに温泉があるとは。石油試掘で偶然発見。北海道には、アイヌ語の発音に漢字を当てた地名が多い中、エベコロベツ（食べ物のある川）を豊富と意識するのも珍しい。偶然見知ったこの地を、数十年後、こんな目的で再訪するとは思わなかった。

2022年8月20、21日の「2022 ほろのベ 核のごみを考える全国交流会」に参加した。主催したのは核廃棄物誘致に反対する道北連絡協議会。会場となった豊富町定住支援センターには、道内各地から数十人が参加。「幌延からの報告」「寿都からの報告」に続き、参加者も発言。夕方は、町セミナーハウスに会場を移して分散会。各地で運動する人の経験や悩みをざくばらんに話す感じのものだった。

初日の会合には、翌日の幌延での要請行動に先立つ準備の意味もある。日本原子力研究開発機構が幌延深地層研究センター建設で北海道や幌延町と合意したのは、2000年（NUMO 設立と同年）のこと。建設時の協定書によれば、これは研究施設であり幌延が将来的に処分場化することはない、その証として研究終了後は埋め戻す。この約束を文字どおり信用する人はいないだろう。それが杞憂でないことを示す出来事が、最近起こった。「20年程度」との当初の研究期間を「2028年末まで延長したい」旨の申し入れがなされた。ルポライターの滝川康治氏は、協定順守を検証するはずの確認会議が計画追認の場になり下がったと批判する（『北方ジャーナル』2021年6月号）。2021年夏には北海道知事が、深度500mまで掘削しての実証実験計画を条件付きで容認する。北海道ははじめから狙われていた。寿都や神恵内の動きも、幌延と関連づけてとらえる視点が必要ではないか。

一夜明け、交流会参加者は車に分乗し、サロベツ原野の彼方に利尻岳を望みながら、幌延の深地層研究センターに向かった。併設されるPR施設

「ゆめ地創館」は一大観光スポット。展望タワーの他、室内展示も充実し（写真）、予約すれば地下坑道の見学が可能なことも。

センターの一室で、同所職員に申し入れ書を手渡す要請行動を行った。最大の焦点は、寿都・神恵内で文献調査が進む今、深地層研究センターがNUMO主催の見学者受入を行うと、研究目的の施設と処分場建設がなし崩し的に一体化させられるのではとの住民側の懸念。これに対するセンター側の回答は、来る者は拒まず、見学者はどなたでも受け入れます。主張は平行線のまま、激しい突き上げが延々と続く。終了時刻は予定を大幅に超過していた。この種のやり合いは私より上の世代にはおなじみで、懐かしささえ感じられる。主催者代表の一人と半ば冗談交じりで話した。「いやあ、久しぶりに労組の団交に出たような気分でしたよ。でも70年代の運動スタイル、今どきの若い人たちは付いて来るんでしょうかねえ。」

放射性廃棄物問題では、最終処分場のみならず、中間貯蔵施設も重要である。青森県では、六ヶ所村の他、むつ市でも中間貯蔵施設の建設が続く。迷惑施設を作る時、国家権力を盾に暴力的に押しつけるのが「沖縄型」なら、とりあえず施設を作りなし崩し的に恒久化を狙うのは「青森・北海道型」と言うべきか。数十年ぶりに訪れた道北の地。あの頃金はなかったが、体力と気力はそれなりにあった。二晩連続の夜行列車など、今では考えられない。だがほんとうに怖いのは、東京での生活が長くなる中、遠い土地の人の痛みを他人事のように思う感覚に、知らず知らず染まっていくなかもしれない。サロベツ原野に浮かぶ利尻岳を、もう一度見る日は来るのだろうか。

（小野 一）

＜＜編集後記＞＞

福井支部ニュースの第11号をお届けします。
支部会員各位の積極的な投稿をお願いします。

（OG）

